



学研

国語大辞典



金田一春彦 編
池田弥三郎



学研
国語大辞典



金田一春彦 編
池田弥三郎



学習研究社

学研国語大辞典

昭和53年4月1日 初版発行

編 者 金 田 春 彦
池 田 弥 三 郎
発 行 人 渡 部 ひ ろ し
編集責任者 大 山 治 義
印 刷 所 大日本印刷株式会社
製 本 所 牧製本印刷株式会社
発 行 所 株式会社 学 習 研 究 社

(〒145) 東京都大田区上池台4-40-5
振替・東京8-142930番

© 学習研究社 1978年 本書内容の無断複写を禁じます
☆この本の内容に関するお問い合わせ、製本上のミスなどがありましたら、下記までお願いします。
文書は、東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)
学研ユーザーサービス部「学研国語大辞典」係
電話は、東京(03)720-1111(大代表)

0581-141 201-1002

序

日本の国語辞書はまだ三流国なみだ——とは、戦後になってもよく耳にした言葉だった。この言葉を、私も国語・国文学を専攻している人間は、生傷にふれられるような気持ちで受け取った。たしかに、自動車・カメラ・テレビ・器械・電卓などの製品から脳神経医学、猿の生態の研究まで、すべて世界一と称せられる文化国家日本である。いっぺんに世界一の辞典とは行かないまでも、何とかして日本の国語辞典として恥ずかしくないものは作れないものか。

日本の国語辞典には、日本語の性格から言っではじめから欧米の辞典に敵がたい点もあった。個々の語の語源の注記がそれである。英独仏などの言語は、それぞれ同じ祖先から別れ出た親族同士の言語である。だから自分の国語の古い姿を示す文献がなくても、ラテン語やギリシア語で何とかを比較することによって *eye* でも *noze* でも、的確に語源をあとづけることができる。ところが日本語は、今のところ確実に同系と言われる言語をもたない。朝鮮語や南方の言語との比較によって語源を明らかにしようと努力した古語辞典はあるが、まだ学界一般の賛同を得ていないし、取り上げられた語彙の数も限られている。「目」とか「鼻」とかいう単語の語源は、結局しろろとの思いつきでも語源説として考慮される現状である。

古語辞典に関しては、日本ではまだまだ欧米に太刀打ちできるものは望まれない。が、現代語ならばどうだろう。これこそ文化国家日本を代表する辞典も作れるのではないか。

日本の現代語の辞典について、従来欠陥とされてきたことは、用例の乏しいことだった。そこに載っているのは、編者が机上で作った簡単な文例ばかり。これははなはだ物足りない。そこで編者は、この辞典の編集をはじめの第一着手として、現代語の用例の広汎な採集を企画した。文芸作品は、言葉の妙用を示すことから考えて、多くの用例をそこに求めたことは当然である。明治の紅葉・露伴から、戦後の司馬遼太郎・辻邦生に至る約二五〇人の作家の作品約三五〇篇を涉獵した。

勿論、文芸作品以外にも、評論・随筆・戯曲・詩歌・俳句・新聞記事の類からも、広く材料を集めたことは言うまでもない。それは各語彙の条にあげた用例から窺われよう。今、校正刷りを読みながら、採った新聞記事の日付の古いことが氣に

なるが、これはそれだけ長い年月がかかってきたものであると理解していただきたい。このような豊富な用例をあげることによって、この辞典は、辞句の解釈に役立つ以外に、語句を使用して文章を綴る場合にも役立つはずである。また、辞典のところどころを開いて読むこと、そのことも楽しく、そうして勉強になる辞典であることを期待する。

また、日本には適当な類語辞典がないこともよく話題になる。この辞典ではそのような要望に応えて、一つ一つの語について、極力類義語をあげ、それとのちがいを述べようとした。ことにこの辞典での新しい試みは、ある単語を後部要素としてできている複合語を網羅してあげたことで、これについては改めて後に述べるとおりであるが、このようなものは、漢和辞典に、後部にその漢字をもつ熟語をその漢字の条に集めてあげたものはあるが、国語辞典で、そこに収めたすべての語彙にわたってあげたものは本書がはじめてである。類語を考える上に、これは大きな力になることを信じて疑わない。

ところで、この辞典は、編集に着手してから今日に至るまで十六年の歳月を費やしている。この長い期間多くのスタッフに多額の費用を支出してゆっくりと仕事をさせようという壮志をいだかれた古岡秀人社長の広量にまず敬服する。

また、この辞典を編集したのは、学研の辞典編集部の人たちである。名前をあげれば、大山治義氏以下、大村奈保美・石塚峯一・鳥飼浩二・斎木俊文・加藤博康・広岡純・西小夜美・塚田邦男・石井美穂子・小西喜久枝・岡部佳子・田中朝子の諸氏である。これらの人たちは、十数年の間、すべての自分の時間まで割いて、この辞典の編集にあてた。若い身空の十年という年月は実に貴重なものである。それを犠牲にしてこの辞典の編集に力を注いでくださったことを思い、衷心から感謝する。私たち編者は、はじめに辞典の編集の方針を考え、時には用例を探し、また原稿の一部を執筆した。そうしてでき上がった原稿を一通り校閲して時に注文をつけることを行ったが、この辞典ができ上がったというのは、そういう人たちの地道な努力によるものであることをここに銘記し、高い敬意を表したい。

昭和五十二年十一月

金田一春彦
池田弥三郎

用例を広く集めて

序文に述べたように、この辞典で私たちは、広く現代の文章を集め、そこから個々の語句・用例を拾うことをした。現代の文章といっても、古典的な小説作品だけではなく、現代の作品をも集め、さらに戯曲・評論・詩歌から新聞記事の類まで集めた。この結果、私たちは、この辞典にいろいろの特色を盛りこむことができたと思ふ。

第一に、今までのどの辞典にもあがっていない語彙を集めることができた。例えば「跡地」「粋作り」「内ゲバ」「エアバス」「大甘」「おたおた」「男っぼい」「素案」「宅配」「追補」「偏差値」などその例である。このような語彙が今までの辞典に洩れているというのはいかにもおかしい感じがするが事実である。外来語に新採用のものが多いことは言うまでもないから語例は省略する。

次に、実際の言葉の使用にあたっては、文芸作品などで、今までの辞典にあがっていないような非標準的な意味で用いている例も多い。今度の辞典ではこのようなことから、従来の辞書にのっていない解釈を追加することも多かった。他動詞「すかす【透かす】」の条に、「④(小手をかざして)遠くによく見えないものを見る」という解を加えたり、「⑤透かし彫りを作りつける」という解を加えたりしたのはその一例である。動詞「かなう」「きこえる」などにも幾つかの解を加えたが、一般に動詞に関しては、従来の辞書の不備を感じるが多かった。それに「訳わけ」のような形式名詞の類も、従来の辞書ではなおざりにされていたジャンルで、今回幾つかの解を補うことが多かった。

文学作品などを見て感じて感じたことは、その中で比喩的に用いた例が意外に多いことである。「軌跡」「蘇生」「礎石」「揃い踏み」「窠息」……の条に掲げた、「ひゆ的に」と注記した語釈など、この辞典ではじめて採録した解釈であるが、用例を集めた間に、自然につけられた語釈である。

また、時に文法的機能とか品詞名の従来の記載に疑問をもった場合も少なくない。「突き出す」という語は、従来の辞典では他動詞に扱っている。しかし、今度の用例調査によって、そこに掲げた芥川の用例もそうであるが、自動詞とすべきものが幾つか拾われた。あえて、□□□に分けて自動詞の解釈を掲げた所以である。

そうして細かいことながら、「つかまる」というような語になると、「吊革につかまる」「巡查につかまる」というような場合とでは、両方とも自動詞といえ、それまでであるが、その性質は随分ちがう。「吊革につかまる」の方は、「つかまられる」という受身の形をもっている。とすると、一步他動詞に近い。一方、「巡查につかまる」の方は、これ全体が受身の形で、自動詞どころか、受身動詞ともいふべきものである。このあたり、三上章氏の提唱の「所動詞」という術語を使いたいと思ったが、そこまでは抜け出ることをせず、ただ違いを本文の解説に記すにとどめた。

単語によっては、どういう文脈にのみ用いられるということを示すことを明らかにしえたものも多い。「解す」という動詞の条に、「ふつう、『げしがたい』『げしかねる』『げしにくい』などの形で使う。」と書いたのなどはその例である。

また、明治以来の文献を集めてみると、その語に当てる漢字の使い方、送り仮名、仮名遣いの多種類なのに驚かされた。はじめここには用例に使われているものを全部出そうかと思つたが、あまりにも多種多様であり、書き方の規範を示すという辞典の建前から、見出しの条には現今通用のものだけを掲げた。

ところで、私たちがいろいろな人々の書いたたくさん作品を讀んでいこううちに感じたことの一つは、日本語は明治以後如何に乱用されているかということである。ことにそれが多くの人の間に共通に用いられていることは、もはや誤用とはなしがたいので、解説の②や③……として掲げた場合がある。「野分」という語は元来、「二十十日」のことで、「大言海」などにはそういう解説をあげているが、漱石や独歩になると、「木枯らし」の同義語として用いている。現代それを正しいと思つている人が多い。これは②としてあげざるを得なかつた。

「入梅」を「つゆ」の意味に用いること、「ごねる」を「ごてる」と區別しないで用いることなども慣用となつたものとして扱つたが、正しい使い方を示すことを怠らなかつた。しかし、「ごぼうぬき」を「競走で前の人を次々とぬいて行くこと」の意に使うのは、まだ俗言・誤用という感が強く、参考欄などで注記するにとどめた。

しかし、一つ一つの文学作品の用例を検討していると、一つの作品にだけしか用例が見つからないものがたくさんあつた。これらの中には貴重な資料として重んずべきものもあつたが、中には、いかに大家の使用例とは言え、その大家のその作品だけにしか見られないもの、また、意味が特殊すぎて、誤用と見るべきかと思われるものは、残念ながら辞典にのせることは見送つた。

例えば、特殊な用例は、漱石のものなどに多く、「艶罪」^{えんざい}「拘々」^{くく}などいずれもその例である。また、国文学者鳥居^{とりぐ}枕の著名な唱歌「箱根八里」の「万丈の山 千仞の谷 前に聳え後に支う」とある、その「さそう」は前後の文脈から「きり立つ」という意味と解されるが、残念ながら他に用例を知らないのので「ささえる」の語に「きり立つ」という意味は、注記しなかった。この類については他日他の機会を得て報告したいと思う。

現代は日本語が乱れている時代と言われているように、新しい日本語の動きの芽のようなものも盛んに文献から拾われる。これにもなるべく厳しい態度で臨むことにした。「しゃべる」とか「滑る」とかという動詞は、五段活用動詞であるから、その命令形は「しゃべれ」「滑れ」であるべきであるが、週刊誌の類に「しゃべろ」とか「滑ろ」とかいう形を見出し、それを契機として、今若い人の間には、かなりこの形が普及している事実が気がついた。これは、五段活用と下一段活用の混合活用とすべき姿であるが、このようなものは、辞書には反映させず、規範的な「しゃべれ」「滑れ」の形だけを取り、五段活用動詞として登録した。「気がおけない」のような慣用句、「情けは人の為ならず」のような諺も、現在ちがった意味に解されていることは有名であるが、これらは採用しなかった。

最後に、一つ一つの用例の意味を考える場合、①の意味と解すべきか②の意味と解すべきか、迷うものがはなはだ多かった。ここには、①の条には、はっきりその意味としか考えられないもの、②の条にもはっきりその意味にしか考えられないものだけをとった。そのために早い時代の大家の作品の用例をさしおいて、時代のくだったもので我慢したものも少なからずある。また、ある文脈からその語彙をとる場合に、まことに適例だと思っても、その前後で短く文が切りにくいために割愛したのも多かつたこともお断りしておく。

金田一春彦

下に付く語について

金田一春彦さんから、学習研究社の国語の辞典の編集を手伝ってはくれまいか、というお話があったのは、もう、五、六年も前のことになるのではないかと思います。わたしなどが、馴れない辞典の編纂に加わっては、金田一さんをはじめ、担当の諸氏の足手まといになるからと、おことわりしましたが、ともかく草稿を読んで、気付いたことを言ってくればいいのだからということで、口上手な金田一さんにとりとう口説き落とされました。そのときはもうすでにずいぶん仕事は進行していましたから、はじめからこの仕事に取り組んだ方々は、ゆうに十年は越しているのだろうと思います。一冊の辞書を造るということは、ほんとうにたいへんなことだと、身をもって知りました。ともかく、全部の原稿に目を通し、気付いたことをチェックするというだけのお手伝いではありましたが、やはり、まる三年はかかったように思います。

読みながら気付いたことの、一つ一つのこととはさておいて、現代語の用語例というものはむずかしい、ということでした。簡単に言って、それは、意味が先か、用例が先か、ということでした。作家は自由自在にことばを駆使していきますし、それがことばが生きているということですから、その変化を一時停止させて、用例から語意を最大公約数的に抽出するということは、かなり困難なことだと悟りました。それは、現代語はまだ決して辞典の中におとなくすわりこんでいくはくれなからです。

もう一つ気付いたことは、語頭の音によって配列するいき方の辞典では、語の下部に付く語による検出ができない、という不便さについてです。

たとえば、「ざわり」という語が下に付くいくつかの語があります。目ざわり・耳ざわり・歯ざわり・舌ざわり・肌ざわり・手ざわりです。これらの語が、メの部やミの部に、ばらばらに散在していたのでは、「ざわり」という語について、考えることができません。右のように集めてみても、「ざわり」の「ざわり」には二様の意味があって、「目ざわり」と「肌ざわり」とでは、「ざわり」の意味が違います。こういうことを考えると、「ざわり」という語を挙げて、そこには「ざわり」という語をできるだけ多く集めておくべきではないかと思いました。少なくとも、この辞典の中に、語頭の音によ

って、それぞれ分散して採録されている語は集めておくべきではないだろうかと思いました。幸いこの提案は、編纂がかなり進行していた途中でしたが、採用されて、本辞典の一つの特徴ともなったと思います。

「一ぼい」という語なども、「よこれっぼい」と「ほこりっぼい」とは少し「ぼい」の意味が違います。よこれっぼいは、よごれやすいということですが、ほこりっぼいは、ほこりの傾向・度合いが強いということで、ほこりやすいなどは訳すことができません。「怒りっぼい」「飽きっぼい」などになると、どちらとも決着が付きません。それらのことを考えるための素材を、この辞典でまずあたっていただけだと思います。

「一めく」という語もずいぶんあります。この辞典では、「一めく」を、接尾語「めく」の項に、三十余り集めてありますが、これも、これだけ集めてみると、微妙な相違が、「めく」の使い方によってあることに、あらためて気が付きます。「色めく」という語などは、「色めいたことは少しもなく」という、芝居の台詞の「色めく」と、「発言に対して、会議の席上が色めき立った」とでは違いがありますが、このように一語の意味の分析をするのにもこの資料は必要だと思えます。

これらのことは、ほんの一、二の気付いたことのアトランダムな抽出にすぎません。

辞典は座右に置いて必要に応じて役に立てるものには違いありませんが、同時に机上に置いて、わたしたちの無意識無反省に使っている今日ただ今のことばについて、その前後左右を点検するための、素材の台帳でもあると思えます。そういうことに、少しでも役立つようにとの意図で編纂された、この『学研国語大辞典』を、わたしたちの日本語のために、大いに活用していただきたいと思えます。

池田弥三郎

凡例

編集方針

- 一、この辞典は、現代語を中心とした国語辞典として編集したもので、現代生活に必要な約十萬語の語彙を収録した。
- 二、明治時代から現代に至るまでの、主な小説・戯曲・評論・詩・短歌・俳句、及び最近の新聞などから広く語彙を収集し、いわゆる現代語のみならず、現代でも使われる古語も収めた。また、外来語・新語も、すでにその意味・用法の固定していると思われるものは積極的に採用した。
- 三、精密な意味分析を行い、類義の語との意味の違いが分かるように解説した。また、使い方の違いなども示し、文章を書くときにも役立つ辞典となるように努めた。
- 四、語釈の理解を助けるため、また、用法を具体的に示すため、小説・評論・詩・短歌・新聞などから収集した用例を豊富に入れ、その典拠を示した。
- 五、参考欄や「」を設けて、比喩的な意味、時代的な背景、語源、表記の違い、使い方の注意など、補足すべき事柄を幅広く収めた。
- 六、見出しを語構成によって分け、その下の部分によって五十音順に配列し、下部の構成要素からも検索できるように、また、資料としても利用できるように配慮した。
- 七、見出し語のかなづかいは「現代かなづかい」を用い、必要に応じて「歴史的かなづかい」でも見出しを立てた。語釈は「現代かなづかい」によった。
- 八、見出しの漢字表記には現代表記の基準を明示した。
- 九、さし絵は、現代の生活では見られなくなった事物、また、解説だ

けでは理解しにくい部分などについて、約六〇〇点を収めた。
十、付録には日本語概説・難音難訓一覧などを収めた。

見出し語

一、見出し語の表記

(1) 見出し語は原則として「現代かなづかい」によって、アンチック体で表記した。和語・漢語はひらがなで表し、外来語はかたかなで表した。ただし、「たばこ」「きせる」など、外来語であつてもすでに日本語化しているものはひらがなで表した。

あたま【頭】

あみジャツ【網ジャツ】

あつえん【庄延】

とつレンズ【凸レンズ】

アップリケ

くわえぎせる【 \times 銜え煙管】

きせる【煙管】

(4) 子見出しになるものは、一字下げて親見出しの部分を「」で代用した。

いっこく【一刻】

いせんきん【千金】

二、語構成

(1) 語構成は必ずしも語源にまではさかのぼらず、現代の言語意識によって区分し、見出しの中で「」を用いてその切れ目を示した。

にくーひつ【肉筆】

あおーっばな【青っ漢】

うーじょう【有情】

しんーせんーび【真善美】

地名・国名・年号などは、原則として切らなかつた。

あかし【明石】

びぜん【備前】

しょうわ【昭和】

(4) 子見出しになるもので、語構成が子見出しの部分にあるものは、

そこに「一」を入れて示した。

じしやう【児童】

―ふくしほう【福祉法】

てんぶ【天賦】

―じんけんせつ【一人権説】

三、語幹と語尾の区別

(1) 動詞・形容詞は、原則としてその終止形で見出しを立て、語幹と語尾の間に「一」を入れた。連語の場合もこれに準じて入れた。

あが・る【上がる】

うつくし・い【美しい】

にえきら・ない【煮え切らない】〔連語〕

(2) 句の場合も活用するものについては「一」を入れた。きまつた形しかとらないものには「一」を入れなかった。

四、表記法

(1) 見出し語の正書法を、見出しのすぐ後の【】の中に示した。ただし、見出しのかなと同一の場合は省略した。ここに言う「正書法」とは、現代一般に、漢字または漢字かな交じりで書き表す場合の、最も標準的と思われる表記法を指す。二つ以上の表記法がある場合、一般的と思われる順序で「一」を用いて併記した。文学作品などに用いられた特殊な表記法、表記上の細かい解説などは参考欄で注記した。

か・う【買う】

かいしやう【壊走・潰走】……………〔参〕「壊走」は代用字。

すてき【素敵】……………〔参〕語源不詳。「素的」「素適」などとも書く。

お・ちる【落ちる】……………〔参〕墮落する。いやしくなる。

……………〔参〕は「墮ちる」とも書く。

(2) かな書きがのぞましいとされるものは、漢字表記の下に「し」で

かな書きの部分を示した。

あいこ【相子あいに】 あかみ【赤味あかみ】

(3) 外来語のうち、ローマ字書きがふつうに行われるものは、【】の中に示した。

ピーティーイー【PTA】

エフエムほうそう【FM放送】

エークラス【Aクラス】

ジスマーク【JISマーク】

(4) 子見出しになるものは、親見出しと重複する部分をかなの部分「一」で、漢字表記の部分は「一」で代用した。

だるま【達磨】

―せん【船】

(5) 中国語・朝鮮語などで、一般に漢字でも多く表記されるものは、【】の中に示した。

マジヤン【麻雀】 ヤンバン【両班】

五、当用漢字とその音訓の表示

(1) 当用漢字表にない字には字の右上に×をつけ、当用漢字表にはあるが、当用漢字音訓表(昭和四十八年六月十八日内閣告示)にその音訓が認められていない字には、字の右上に△をつけた。中国語・朝鮮語では、当用漢字表にない字に×を付するにとどめた。

漢字の字体は、当用漢字、当用漢字補正資料、及び人名用漢字にはいわゆる新字体を用い、その他は一般に広く用いられている字体を採用した。

(2) 当用漢字音訓表の「付表」に示された、いわゆる「付表の語」は、へゝを付して示した。なお、付表の語例、一言居士・立ち退く(の構成要素となるもの(例、居士・退く)にもへゝを付した)ものがある。

うなばら【海原】
 いちげん【一言】
 つゆ【梅雨】
 ーこじ【居士】

六、送りがな
 (イ)送りがなは、昭和四十八年六月十八日内閣告示の「送り仮名の付け方」を参考とした。送りがなを省くことのできるものは()の中に示し、さらに送ることのできるものはへの中を示した。

うか・ぶ【浮(か)ぶ】 おこな・う【行(な)う】

(ロ)活用のある複合語には原則として()を付さず、へは派生語・複合語にまでは及ぼさなかった。

見出し語の配列

一、配列は五十音順とした。

二、五十音で順序のきまらないものは次の約束に従った。

(イ) 清音・濁音・半濁音の順。

はは【母】

はば【幅】

ばば【馬場】

ババ

(ロ) 長音は発音に従って、ア・イ・ウ・エ・オのいずれかを当てた位置に置く。

バーナー ↓ バアナア

ヒーター ↓ ヒイタア

エース ↓ エエス

コーチ ↓ コオチ

(ハ) 促音の「っ」、拗音の「ゃ」「ゅ」「ょ」は、それぞれ直音の「つ」「や」「ゆ」「よ」のあとに置く。

はつか【二十日】
 きやく【規約】

はっか【発火】
 きやく【客】

(イ) 外来語の表記で用いる小さな字の「ァ」「ィ」「ッ」「ェ」「ォ」は、ふつうの字のあとに置く。

ふーあん【不安】

ファン

三、見出しのながが同じときは、次の約束に従った。

(イ) ひらがな書き・かたかな書きの順。

ぼつーと

ボット

(ロ) (イ)が同じときは、次の品詞順。

接辞(接頭語・接尾語)・助数詞・造語・名詞・形式名詞・代名詞・連体詞・副詞・接続詞・感動詞・動詞・形容詞・形容動詞・助動詞・助詞・連語・句。

(ハ) (イ)が同じときは、一字めの漢字の「康熙字典」の配列順。

四、複合語・慣用句・ことわざなどは、親見出しのあるものについては、その後には一字下げて追い込み、親見出しを「」で代用した。

親見出しが、動詞・形容詞の場合は、その語幹の部分を「」で代用した。

ほしげい【捕鯨】

ーせん【船】

あ・う【会う・逢う】

ーうはわかれのはじめ【ーうは別れの始め】

五、複合語は語構成の最初の部分が独立見出しとして立っている場合には、その後には追い込んだ。

親見出しに扱うものは次のようにきめた。

(イ) 和語の場合、見出しのながが三字以上(拗音・促音などの「ゃ」「

「っ」なども一字とする)から成るもの。

つきーみ【月見】

むらさき【紫】

ーそう【一草】

ーずいしょう【一水晶】

ただし、次の場合は親見出しにしない。

- ① 見出しのながな三字で漢字一字を当てるもの。(例えば、「こころあたり(心当たり)」「こころ(心)」、「しょくあたり(食当たり)」の「しょく(食)」など)
- ② 接尾語のついたもの。(例えば、「ひとっつ(一つ)」「ふたり(二人)」など)

(四) 漢語の場合は見出しのながな二字以上(拗音・促音などの「ゃ」「っ」なども一字とする)から成り、二字以上の漢字が当たるもの。

きーか【幾何】

ほっしぎ【発作】

ーもよう【一模様】

ーてき【一的】

(ハ) 固有名詞(地名・人名など)。

えど【江戸】

キリスト

ーまえ【一前】

ーきよう【一教】

(ニ) 外来語の場合は、見出しのながな二字以上(拗音・促音などの「ゃ」「っ」なども一字とする)から成り、独立性が強いと考えられるもの。

キー

ゴール

ーパンチャー

ーイン

ただし、アルファベットに和語・漢語や他の外来語がついたものは、見出しが四字以上のもののみ追い込みにした。

エス【S・s】

エックス【X・x】

エスーばん【S判】

ーせん【X線】

六、慣用句・ことわざなどは、親見出しの後に五十音順で並べ、原則として複合語より先に並べた。

歴史的かなづかい

一、歴史的かなづかいが、現代かなづかいと異なるときは、漢字表記の【】の下に、字音語はかたかなで、字訓語はひらがなで、小さく二行にわって記した。和語は語構成にしたがって示し、漢語は語構成に関係なく文字を単位として示し、同じ部分は「で代用した。漢字表記のないものは、見出しのすぐ下に記した。

なれーあい【×馴(れ)合(い)】^{いあ}

こうしんーりよう【香辛料】^{きやうしん}

あしらい 純

二、歴史的かなづかいに異なる場合は、次のように表した。

(イ) 表記が二種以上あり、歴史的かなづかいが異なる場合はその表記の順に並列して示した。

いちーおう【一応・一往】^{いっおう}

(ロ) 和語で、従来二通り以上のかなづかいがあるものについては、その両方を示した。

すもう【(へ)相撲】^{すまゝ}

もちーいる【用いる】^{もちい}

* 「法」については、一般語は「ハフ」(漢音)、仏教語は「ホフ」(呉音)とした。

ほうーぶん【法文】^{ほうぶん}

ほうーみ【法味】^{ほうみ}

三、子見出しの歴史的かなづかいは、親見出しと重複しない部分について、独立見出しに準じて示した。句については歴史的かなづかいは示さなかった。

きゅうーめん【球面】^{きゅうめん}

ーきよう【一鏡】^{きやう}

品詞・活用

一、見出し語の品詞・活用の種類は、おおむね学校文法の立場に従い、略語をもって《》内に表示した。略語は凡例の一六ページ参照のこと。

- (イ) 接尾語のうち、数につくものは助数詞とした。
- (ロ) 名詞のうち、代名詞と形式名詞は普通の名詞と区別した。
- (ハ) 動詞は、自動詞・他動詞及び補助動詞を区別した。
- (ニ) 形容詞は、補助形容詞を区別した。文語の場合、「ク活用」「シク活用」を区別した。
- (ホ) 形容動詞は、文語の場合、「ナリ活用」「タリ活用」を区別した。口語の場合は、一般の活用(ニナ型活用)と「トタル型活用」を区別した。

(ヘ) 「する」をつけてサ変動詞となるものは、《名・自サ》《名・他サ》《副・自サ》などの形で示した。

(ト) 連語は《連語》、慣用句・ことわざなどは《句》とした。

(チ) 助詞は、格助詞・接続助詞・副助詞・係助詞・終助詞・間投助詞・並立助詞・準体助詞の八つに分類した。

二、見出しは原則として口語の終止形で掲げ、文語の終止形及び活用の種類を項目の末尾に掲げた。

- あ・ける【明ける】《自下一》……………文あ・く《下二》
- ほそ・い【細い】《形》……………文ほそ・し《ク》
- かん・する【関する】シク《自サ変》……………文くわん
- ・す《サ変》

- しずか【静か】ナリ《形動》……………文《ナリ》

三、主な助動詞については、語釈の前に活用変化を示した。一つの活用形の欄に二つ以上の変化形があるときは、「・」で並列した。活

用変化の欠けているものは○で示した。

ない《助動》〔活用〕なかる・なく・なかつ・ない・ない・なけれ○

解説

一、語釈の区分

- (イ) 同一項目内で品詞が異なり、意味が異なるときは、(一)(二)(三)の形で分けて解説した。
- (ロ) 語釈が二つ以上に分かれるときは、原則として基本的な意味を先にして、①②③……の番号によって分けた。それよりも大きな区分には①②③……を用い、さらに小さく分けたときはabcを用いた。

二、語源・語誌・音便・文法的説明などは「一」に入れて説明した。

まゝなこ【眼】《名》「目の子」の意。もと黒目のこと
なこうど【仲人】シク《名》「なかびと」の音便
あき・め・く【秋めく】《自五》「めく」は「…のきざし」がみえる」意の接尾語

三、専門用語や古語・隠語・俗語などは、解説の前に「」を用いて示した。略語は凡例の一六ページ参照のこと。

えいきごう【嬰記号】ウツ《名》〔音〕音の高さを…。
いけしかな・い【いけ好かない】《連語》「いけ」は接頭語〔俗〕……………

四、類義語との差異を示すため、また解説をより具体的にするため、解説の一部を「」に入れて示した。

なご・む【和む】《自五》「心持ち・表情などが」おだやかになる。……………

五、くり返しをさけるため、・と()を用いて解説を簡潔にした。

いろーじろ【色白】《名・形動》はだ(とくに顔)が白

い・こと(人)。

*この場合は、「はだが白いこと。また、その人。」「とくに顔が白いこと。また、その人。」の省略。

かたつき【肩付き】《名》肩の(あたりの)様子。

*この場合は、「肩の様子。また、肩のあたりの様子。」の省略。

六、その語の使い方の違いは、その語釈のあとに「」を用いて示した。

えんーぜん【婉然】《形動》「文」しとやかで美

しいようす。「ふつう、女性の形容に使う」

七、アルファベットで表す記号などは、「記号」として示した。この場合は見出し語の音形ではなく、表記に注目して解説した。

エー【A・a】《英語アルファベットの第一番目のものを表す名称》①《名》②連続したものの第一番目のもの。

また、最初。「一年ー組」「ーからZまで……」……

③(一)は「A」と書く。

④(記号)①「数」②数式で第一の既知数を表す記号。③「a」と書く。④「答え」を表す記号。⑤「A」と書く。▽英 answer の略。……⑥トランプ

で「エース」を表す記号。⑦「A」と書き「エース」と読む。▽英 ace の略。

八、表記上の注意、語源、漢籍などからでた語のその原典、比喩的な意味、類義語の使い分けなどは、参考欄を設けて記述した。また、特に故事成語については、源としてその成り立ちを示した。

すいーこう【推敲】《名・他サ》……源中国の唐の

詩人賈島が「僧は推す月下の門」の句を作り、「推す」を「敲たく」にするかどうか考え迷って何

度も練り直したという故事による。……

用例

一、用例は、明治から現代に至るまでの、小説・戯曲・評論・詩・短歌・俳句、及び最近の新聞などから収集した用例カードから精選した。収集した作品名は、付録二二五七ページを参照のこと。

二、原典が文語体で書かれているものについては歴史のかなづかいで記し、口語体で書かれているものは現代かなづかいになおした。詩・短歌・俳句については、文語体・口語体にかかわらず、原典のかなづかいどおりとした。字体は、当用漢字にあるものは、新字体にかえた。くり返し符号の「 \angle 」「 \llcorner 」「 \lrcorner 」は用いなかった。

三、用例中、文章の途中や後の部分を省略した場合は、「……」で示した。また、それだけでは理解しにくい場合は、(一)や(二)を用いて、文脈がわかるように補足した。

あきらめる【諦める】《他下一》……「民子は私に

そう(他家ノ嫁ニナレト)云われて見れば自分の身をーめる外はない……(伊藤左・野菊の墓)」

四、用例の出典はへゝに入れて、作者名・作品名の順で略称を用いて示した。評論・詩などの題は省略せず示した。新聞から採った用例は、その新聞の発行年月日・新聞名・朝刊夕刊の別などを示し、社説にはその旨記した。

小説・戯曲などで、その作者名は姓のみで示し、同姓の場合は、年代の古い作者を姓のみで示し、後出の作者については名前の一字を示して区別した。

尾崎紅葉 ↓ 尾崎

尾崎士郎 ↓ 尾崎士

尾崎一雄 ↓ 尾崎一

俳句・短歌などは、作者名と俳句・短歌などの別を示した。

あおば【青葉】……「目には山郭公（山郭公）と初松魚

〈山口素堂・俳句〉

作品名は適宜「…」で省略した。

五、見出し語に相当する部分を次の約束によって示した。

(イ) 活用しない語は「―」を用いて示した。

おん【恩】……「有難う。この―は一生忘れねえぜ

〈大岡・野火〉

(ロ) 活用語は「―」で語幹を示し、「・」以下に活用する部分を示した。ただし、形容動詞及び《名・自サ》《名・他サ》などで示されるサ変動詞は、語幹のみ「―」で代用して、「・」をつけなかった。

さまた・げる【妨げる】《他下一》①……「作業は風

に―げられて進まなかった〈三島・潮騒〉

おだやか【穏やか】《形動》①……「見張の男の死貌

はまことに―であった〈梅崎・桜島〉

かいそう【回想】《名・他サ》……「(吉岡ハ)

巻煙草に火をつけ思うともなく七八年前の事を―し

た〈永井・腕くらげ〉

(ハ) 語幹・語尾の区別のない動詞、及び助動詞・助詞は「―」で代用せず、総出しの形で示した。助動詞・助詞は特にアンチック体で示した。

きる【着る】《他上一》①……「洋服を着る」

させる【助動】……「西国へ往く舟に乗り換えさせる

ことが出来る〈森・山椒大夫〉

か【副助】……「こころざしをはたして、いつの

日にか帰らん、〈文部省唱歌・故郷〉

外来語

一、外来語の語釈は、外国語の意味ではなく、日本語として使われている範囲に限った。独立しては使われないが、造語成分として使われるものは《造語》として掲げた。

ボーイ【造語】「男の子」「少年」の意を表す。㊦ガ

ール。㊦《名》給仕。ウエーター。……▽英 low

二、つづりが同じでも語源の異なるものは別見出しに扱った。

カウンター《名》①計算係。……▽英 counter

カウンター《名》①「カウンターブロー」の略。……

▽英 counter ②逆・反対

三、外来語のつづり・原国名などの表示は次のようにきめた。

(イ) 外来語の原語のつづりは、原則として語釈の最後に▽をつけて示し、その言語名を記した。原語は直接伝来したと思われるものをあげ、二か国以上から入ったと思われるものは二つ以上併記した。ロシア語・ギリシア語・中国語・朝鮮語・梵語などはローマ字にかえて示した。

ナース《名》看護婦。▽英 nurse

アペリチフ《名》……▽法 apéritif

イクラ《名》……▽日 ikra

チョンガー《名》……▽朝鮮 chong kak

アートマン《名》……▽梵語 ātman

(ロ) もと、多く漢字を当てたものは参考欄で注記した。

(ハ) ゴム《名》……参もと「護謨」と当てた。▽法 gom

(イ) 原語音からずれている外来語、また外国語に擬して日本で作られた語などは、▽のあとに原語を示し「…から」「…のなまり」。「…と…からの和製語。」などの形で記し、適宜、原語の意味を